

地域活性化の取組におけるソーシャル・イノベーション創出に

関する研究－佐賀県有田町を事例に－

熊澤 慎太郎¹

Research on Creation of Social Innovation in Regional Revitalization Efforts: － A Case Study of Arita Town, Saga Prefecture －

KUMAZAWA Shintaro

1. 背景と研究目的

日本の労働生産性が他国比較で下がり続けている。2022 年の日本の 1 人当たり労働生産性（就業者 1 人当たり付加価値）は 85,329 ドル（833 万円）で、ポルトガル（88,777 ドル／866 万円）のほか、ハンガリー（85,476 ドル／834 万円）やラトビア（83,982／819 万円）といった東欧諸国・バルト海沿岸諸国とほぼ同水準となっており、順位でみても、1970 年以降で最も低い 31 位に落ち込んでいる（公益財団法人日本生産性本部，2023）。

労働生産性とは、「GDP（付加価値）／就業者数」で算出される。筆者は GDP（付加価値）を増やすために必要な、新しいことに挑戦し、新しい価値を生み出そうとするマインドが日本には決定的に欠けているように感じられることに問題意識を持ち、人口減少や産業衰退などの課題が顕在化している地域において、企業・行政・大学・金融機関などの主要なステークホルダーを巻き込み、産官学金連携という形で、学生をはじめとした若い世代が様々な挑戦を行い、地域が抱える喫緊の課題を解決する仕組みを作ることが、新しいことに挑戦し、新しい価値が生み出される好循環の成功事例となると考え、佐賀県有田町における学生とのプロジェクトを進めている（熊澤 2022、熊澤 2023）。

本稿では、新しいことに挑戦し、新しい価値が生み出されることについて、ソーシャル・イノベーションの分野での先行研究に触れた上で（2 章）、佐賀県有田町における学生とのプロジェクトの活動を報告し（3 章）、プロジェクトに参加した学生の成長をスキル可視化により分析する（4 章）。また今年度に得られた示唆を踏まえ、来年度以降のプロジェクトを通じたソーシャル・イノベーションにおける理論的な仮説検証について展望を行う（5 章）。

*本研究は 2023 年度昭和女子大学現代ビジネス研究所の研究助成を受けたものである。

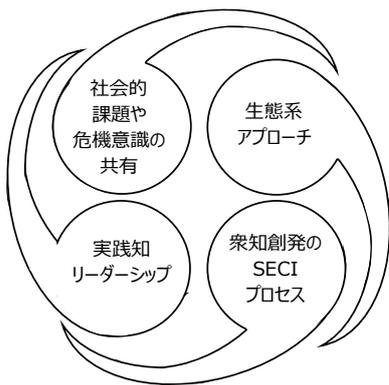
¹ 昭和女子大学現代ビジネス研究所 研究員

2. 先行研究

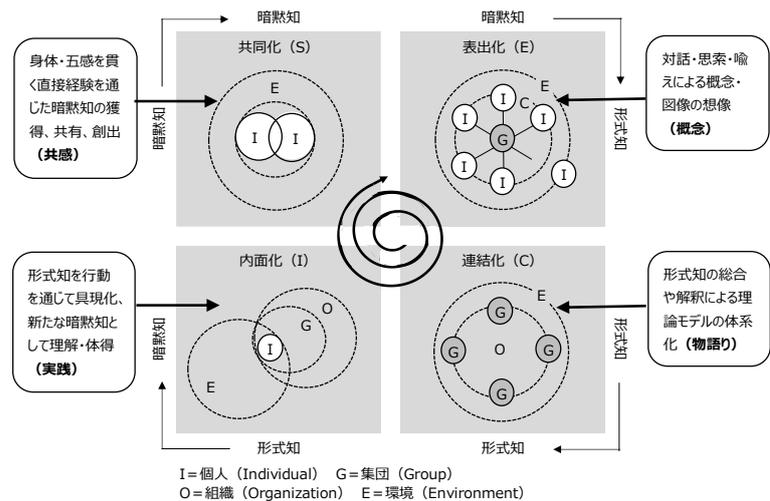
先行研究における「ソーシャル・イノベーション」については、学術的に多様な定義があるが、筆者は（野中・廣瀬・平田 2014）の定義を採用し、研究を進めている（熊澤 2023）。

ソーシャル・イノベーションを社会変革と言い換えれば、社会変革を起こすには、地域や組織をつなぐ生態系や文脈を把握し、衆知を結集する知識創造プロセスを創ることが重要とされている。また、そのプロセスを持続させる役割は実践知を持つリーダーが担い、社会の課題や危機を察知し、解決策を行動に落とし込み、人々を巻き込みながら変革を起こすとされている（野中・廣瀬・平田 2014）。そして、その社会変革という現象は、①なにをどうやるべきかという「社会的課題や危機意識の共有」、②社会やビジネスの仕組みをより大きな関係性に拡張し生態系として捉えなおすことによって知の変換レベルに変化を起こして持続性を確保する「生態系アプローチ」、③地域や組織の生態系や文脈を把握し地域に根ざす知から新たな知を創造する「衆知創発の SECI モデルプロセス」、この三つを総合し未来社会のデザインを構想する社会変革のイネーブラーとしての「実践知のリーダーシップ」が要件となっている社会的価値共創のフレームワークとして図 1 のように提示されている（野中・廣瀬・平田 2014）。また「衆知創発の SECI モデルプロセス」に関しては、知識には性質の異なる二つのタイプの知識、すなわち暗黙知（身体での個別具体の経験を通して得られる信念や思いを含んだ主観的な知識）と形式知（不変の言語や数値によって表現でき、ICT を使うことによってデータベース化もできる客観的な知識）があり、図 2 のようにこの二つのタイプの知が行為を通じて相互変換されることによって、新しい知識が創造されるとされている（野中・廣瀬・平田 2014）。

【図 1：社会的価値共創の要件】



【図 2：知識創造の基幹プロセス：SECI モデル】



出典：野中・廣瀬・平田 2014 を元に筆者作成

筆者はこのプロセスを持続させる実践知を持つリーダーがいない場合に、学生をはじめとした若い世代の行動がきっかけをつくり、必ずしもリーダーでない大人たちが若い世代の行動をサポートすることで、このプロセスを持続させる役割を果たし、ソーシャル・イノベーションを達成するのではないかとの仮説を持ち、活動を通じて図 1・図 2 の実現を目指し、研究を進めている（熊澤 2023）。

3. 佐賀県有田町に関わるプロジェクトの活動報告

3.1 よかね ARITA プロジェクトの概要

日本磁器発祥の地である佐賀県有田町（以下、有田町）との地域活性化に関する協働プロジェクト「よかね ARITA プロジェクト」を 2021 年度から開始し、2022 年 3 月には有田町と本学で、地域づくりの推進、観光・産業振興の実現に資するための「昭和女子大学と有田町との連携協力に関する包括協定」を締結し、学生の学修成果を地域活性化のための課題発見・解決に役立てることを目指し、より一層の連携を強化して取り組んでいる。

3 年目となる 2023 年度は、学生メンバー 9 名、アドバイザーである磯野彰彦特任教授および筆者の計 11 名で活動を行なった。

【表 1：2023 年度よかね ARITA プロジェクトメンバー】

学生メンバー (順不同)	石坂 友梨	国際学科 4年
	木下 恵里	ビジネスデザイン学科 3年
	渡邊 春灯	ビジネスデザイン学科 3年
	関根 日南子	現代教養学科 3年
	中村 玲季	国際学科 3年
	井手 彩央里	歴史文化学科 2年
	石井 愛海	会計ファイナンス学科 2年
	石田 陽菜	食安全マネジメント学科 1年
	金尾 理奈	食安全マネジメント学科 1年
アドバイザー	磯野 彰彦	キャリア支援センター長 グローバルビジネス学部会計ファイナンス学科特任教授
研究員	熊澤 慎太郎	現代ビジネス研究所 研究員

【表 2：2023 年度よかね ARITA プロジェクト活動概要】

定例ミーティング
第1回（2023年6月10日）から第14回（2023年12月23日）まで隔週で開催
オフラインイベント
有田町訪問による現地研修（2023年8月26日～29日）
現代ビジネス研究所と有田町役場共催によるイベントを有田町で開催（2023年8月27日）
地方創生プロジェクト学生会議に参加（2023年9月29日）
秋桜祭での有田焼オリジナルアクセサリーの販売（2023年11月11日～12日）
オンラインイベント
有田町役場・（一社）有田観光協会へのスタディツアーの提案（2023年12月9日）

有田町は第 2 次有田町総合計画における基本目標の一つとして「食と器で人が集まりつながらるまち」を掲げ、観光の振興に取り組んでおり、近年の観光客数は年間 250 万人ほどで推移していたが、そのうち半数は全国規模の集客力を持つ有田陶器市への来訪者となっていることから、有田町としては通年観光客の増加を目指している（佐賀県有田町役場 2018）。そこで今年度のよかね ARITA プロジェクトは、年間を通じて自分たちと年齢が近い若い世代が有田町へ観光にくるための仕組みづくりとして、スタディツアーを企画し、有田町役場・(一社)有田観光協会へ提案することを活動の軸とした。

3.2 現代ビジネス研究所と有田町役場共催によるイベントを有田町で開催

スタディツアーの企画立案に向けた調査を目的に、よかね ARITA プロジェクトのメンバーによる今年度の現地研修を 2023 年 8 月 26 日（土）から 29 日（火）の日程で実施した。現地研修では陶山神社や泉山磁石場、アリタセラなど有田町の名所を巡ると共に、有田町役場商工観光課・農林課・(株)有田まちづくり公社とのディスカッションや、(株)香蘭社および溪山窯の見学、NPO 法人灯す屋でのインタビューにより、有田町への理解を深めた。

また 8 月 27 日（日）には、現代ビジネス研究所と有田町役場の共催にて、公選初代有田町長の生家で国の重要伝統的建造物群保存地区の一面にある小路庵を会場に「多面的な視点から見る 未来を紡ぐ若者による地方創生」をテーマにイベントを開催、対面での現地参加枠に 6 名、オンラインでの参加枠に 27 名の合計 33 名のみなさまに申し込まれた。

第 1 部のパネルディスカッションでは、有田町長の松尾佳昭様、有田焼アクセサリーの製造・販売を行う cocosara 代表の金氏絵梨奈様、Z 世代クリエイターによる Z 世代のためのクリエイティブ制作事業を手掛ける Fiom 合同会社 CEO の竹下洋平様、および筆者の 4 名にて、それぞれの立場から見た、若者が地方創生に関わる意義や、有田町に関わる若者を増やすためのアプローチについて語った。登壇者からは「発信」や「きっかけ」が重要との意見が出され、松尾町長からの「有田町の魅力を知ってもらうための発信や、実際に有田町へ来てもらうためのきっかけにより、有田町のファンを増やしていく。若者に提言していただき、それに寄り添って、まろやかな政策にしたい。」とお言葉でパネルディスカッションを締めくくった。

第 2 部では有田焼アクセサリーのオリジナル商品デザイン案作りを現地参加のみなさまに実施いただき、紙粘土で製作したデザイン案のうち 1 点を実際に商品化し、後述の秋桜祭での販売商品とすると共に、商品化したアクセサリーをご本人に贈呈した。また第 3 部では有田町で 10 月に開催される「有田皿山まつり」でパレードが行われる「有田皿山節」の体験として、有田焼の皿を打ち鳴らす皿踊りのレクチャーを受け、よかね ARITA プロジェクトの学生メンバーも含めて、小路庵に集った全員で有田町の伝統的な踊りを満喫した。

当日は新聞やケーブルテレビなどの現地メディアにも取材にいらいただき、東京の大学生が地域外の若者の視点で、有田町の活性化に取り組む意義を、地域内のみなさまに伝える一助になったものとする。

【写真 1 : Peatix でのイベント告知】



【写真 2 : 小路庵にて】



3.3 秋桜祭での有田焼オリジナルアクセサリーの販売

昨年度の取組で大好評だった秋桜祭での有田焼オリジナルアクセサリーの販売を今年度も 2023 年 11 月 11 日 (土) と 12 日 (日) の 2 日間で実施した。これはプロジェクト発足当初からの学生メンバーの「有田焼を中心に有田の魅力を発信したい」という想いを実現するため、若い世代への有田焼の認知度を上げることを企図し、2021 年度の学生メンバーが有田焼アクセサリーの製造・販売を手掛ける cocosara とのコラボレーションを発案して始まったものである (熊澤 2023)。

昨年度の秋桜祭で商品が会期中途中で売り切れてしまったり、商品種類が少なくご要望に応えられなかったりした経験を踏まえ、今年度は細かなデザインや配色を工夫して種類を増やしたり、男性向け商品を取り入れたりして、商品ラインアップを拡充すると共に、価格の引き上げにも挑戦した。また当日は cocosara 代表の金氏様にも会場にお越しいただき、ディスプレイの配置などのアドバイスを受けながら、販売を行なった。その結果、昨年度の売上の約 2 倍となる 202 個を販売することができたものの、準備した商品の 1/3 が売れ残る結果となり、価格引き上げと販売個数増加の両方を目指した学生メンバーにとっては、商品販売の難しさを感じることとなった。

【写真 3 : 試作品づくりの様子】



【写真 4 : SNS での告知】



3.4 有田町役場・(一社) 有田観光協会へのスタディツアーの提案

今年度のよかね ARITA プロジェクトは、年間を通じて若い世代が有田町へ観光にくるための仕組みづくりとして、スタディツアーを企画することを最大のテーマとして活動してきた。これは「有田焼を中心に有田の魅力を発信したい」との想いで続けてきた本プロジェクトも 3 年目を迎え、有田町は有田焼に代表される歴史や文化、豊かな自然や伝統的な町並みなど様々な魅力に溢れているにも関わらず、観光客が訪れる時期が 5 月の「有田陶器市」と 11 月の「秋の有田陶磁器まつり」に集中しており、かつ若い世代の観光客が少ないことを課題として認識したためである。このことから、有田町において特段のイベントがなく観光客が少ない 8 月の時期に、近隣の大学生が夏休みを利用して有田町を訪れる仕組みを作ることができれば、有田町が目指す通年観光の一助になると考え、企画を検討してきた。

まず現在の有田町における観光コンテンツが過度に有田焼に集中していることに注目し、窯業と並ぶ主要産業である農業を活用できないかを検討した。しかしながら、8 月の現地研修での有田町役場商工観光課・農林課・(株) 有田まちづくり公社とのディスカッションを通じて、有田町で農業に携わるみなさまは 9 割が兼業農家であり、後継者不足に悩む中、農業を通じた観光資源を生み出す余力がないことを知った。

また 11 月には有田町出身の大学生に、有田町における大学生の実状に関するインタビューを行なったところ、「有田町出身のみなさまは有田陶器市に学校のクラス単位で参加したり、学校に窯があったりと焼き物に関しては英才教育を受けてきているが、職人の高齢化や後継者不足の課題が浮き彫りになっている状況を変えるには、地域外から来た人の視点が必要」との意見であった。さらに「有田町は大学生に限らず、近くの人が集まる機会がないため、物理的な場所を用意する必要がある」との意見もいただいた。

このような事前のリサーチを踏まえ、今年度の活動の集大成として、2023 年 12 月 9 日(土) に有田町長の松尾佳昭様、有田町役場まちづくり課、(一社) 有田観光協会、(株) 有田まちづくり公社向けに開催したオンラインでの提案会では、(一社) 有田観光協会が運営する「有田観光まちなかガイド」の仕組みを活かした提案を行なった。

「有田観光まちなかガイド」とは、一定の研修を受けたガイドによる地元ならではの短時間ツアーである。学生メンバーは事前のリサーチから、有田町の課題は地域外の学生の視点からは「観光業の人手不足」「大学生・若者が有田町を訪れるきっかけがない」、地域内の学生の視点からは「学生同士の交流の機会が少ない」ことにあると捉え、18 歳以上であれば経験の有無を問わずに研修を受けることによって誰でもガイドになれる「有田観光まちなかガイド」において「①大学生・若者のガイド参加促進」「②大学生・若者による『ガイドおすすめコース』を提案」することにより、その双方を解決できると考え、提案を行なった。

この提案に対し、有田町側の参加者からは、「『有田観光まちなかガイド』はボランティアではなくプロのガイドであり、実際に稼働するためには研修を受けて 2 年間ぐらいの経験を積む必要があるため、本当のガイドを目指すよりも学生同士の交流を主眼に置いたほうがよい。ガイド養成コースをツアーにして、通常の視点では出てこない有田の深い魅力を知

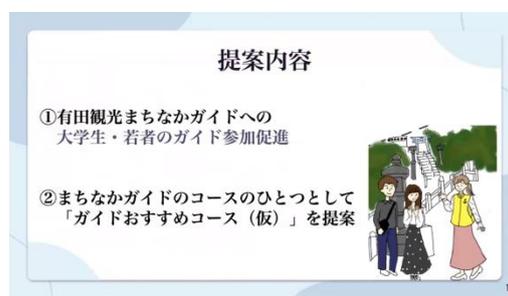
ってもらうコースを学生が作り、その中で学生同士が交流するのがよいのではないか」との意見をいただいた。松尾町長からは、「今の『有田観光まちなかガイド』のコースは年配の目線で作った『The 有田』の内容となっているので、若者から見て今の有田町がどのように見えているのかという観点で、よかね ARITA コースを作るのも面白い。今、我々が一番悩んでいて手が届かないところを、よかね ARITA プロジェクトは取り組んでくれている」とのお言葉に加え、今後の取組に関して、いくつかのアイデアをいただいた。

今回のディスカッションを踏まえ、来年度の活動は「有田町での交流イベント」と「東京の会場における有田町をテーマにしたイベント」の開催を軸に検討を進めていきたい。

【写真 5：オンラインでの提案会】



【写真 6：提案内容】



4. スキル可視化による分析

本活動の目的は図 1・図 2 の実現ではあるが、この目的が道半ばであるため、今年度は、半年間のプロジェクト活動を通じた学生メンバーの成長にも焦点を当て、(株) SP 総研の協力を得て、同社のスキル可視化の手法を用い、分析を行なった。プロジェクトの開始時(2023年6月24日(土)・7月8日(土))と終了時(2023年12月9日(土)・12月23日(土))に同社代表取締役の民岡良様により学生メンバーに対してワークショップを行っていたが、学生メンバーそれぞれが自分自身を形容する「ジョブ・タイトル」を考えると共に、各自がこれまで果たしてきた役割を「ジョブの概要」として整理した。その内容をもとに同社で、任務や職責への変換を通じて、保有している「スキル・コンピテンシー」として抽出し、その「スキル・コンピテンシー」に関して、学生メンバーが自己認識する習熟度を確認することで可視化した。

各自が自分自身を形容した「ジョブ・タイトル」に関して、表 3 で半年間の変化を見ると、2023年7月時点では個人の性格や行動を表すものが多かったのに対して、2023年12月には他者との関係性や組織における役割を表現しているものに変化している。これは共通の目標に向かって、学生メンバーがチームとして、お互いの関係性を鑑みながら、それぞれの役割を果たそうとの意識で行動してきたことによるものと言えよう。

また表 4 での「スキル・コンピテンシー」の変化では、プロジェクト推進において一般的に必要なと思われる概念としてのスキルについて、保有と認識する人の割合が増えているの

に加えて、橋渡し・リエゾン、ネットワーキング、ソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS)、プロモーション、広報活動、プレゼンテーション、コーチング、マルチタスクなど、プロジェクト推進の中で、各自が実際に経験した具体的な行動に紐づけられるスキルが、新たに身についたスキルとして数多く追加されることとなった。これは今年度のプロジェクトでは、関係者との各種調整における筆者の関与を低め、学生メンバーの主体性を重視し、学生メンバーそれぞれが担う役割を大幅に高めたことによるものであろう。

【表 3：ジョブ・タイトルの変化】

	2023年7月	2023年12月
①	前向き	笑顔な波乗り
②	スケジューラー	サポーター
③	絶賛就活中	コーチ型ポジティブマイスター
④	献身家	潤滑油
⑤	その時を楽しむ情報収集家	アイデアコーディネーター
⑥	ウキウキ仲介人	必殺見習い人
⑦	常に勉強中	デザインインベンター
⑧	ニコニコマン	壁を取り払う人
⑨	ワクワク大好きマン	オリジナルクリエイター

【表 4：スキル・コンピテンシーの変化】

	スキル・コンピテンシー名
新たに身についたスキル 18個	橋渡し・リエゾン、ネットワーキング、率先力、人材配置および採用、顧客志向、価値提案、ソーシャル・ネットワーク・サービス (SNS)、プロモーション、リーダーシップ、社交性、広報活動、正確さと細部にわたる注意力、専門性を通じた影響力、プレゼンテーション、革新性、コーチング、業務プロセスの改善、マルチタスク
保有と認識する人の割合が増えたスキル 13個	前向きな態度、目標管理、結果を出す力、人材重視、学習および自己啓発、チームの構築、ナレッジシェア、コミュニケーション力、チャレンジ指向、分析的思考、柔軟性および適応性、プロジェクト管理、多様性の管理

5. 今年度に得られた示唆と来年度への展望

よかね ARITA プロジェクトが開始してから 3 年間が経過し、有田町役場と有田観光協会のサポートを受けて、1 年目はオンラインイベント、2 年目は秋の有田陶磁器まつりでの出店、3 年目は現地イベントを実施。また 2 年目と 3 年目は cocosara のサポートを受けて、有田焼オリジナルアクセサリーを販売する等、大人たちが若い世代の行動をサポートする実績は着実に積みあがっている。

では、よかね ARITA プロジェクトにおける学生メンバーが、ソーシャル・イノベーション創出の役割を果たしているのかについて、今年度の学生メンバー 9 名に対して半年間の活動を終えて実施したアンケートから検証したい。

まず「活動を通じて、有田の活性化に貢献している実感はありますか」という質問に対しては、「かなりある」が 1 名 (11%)、「少しある」が 6 名 (66%)、「どちらでもない」が 2 名 (22%) という結果となった。これは、学生メンバーの主導により、有田町でのイベント開催、秋桜祭での有田焼オリジナルアクセサリーの販売、スタディツアーの提案など、学生ならではの付加価値をつけた具体的なアウトプットを提供できたことによるものであろう。

次に「活動を通じて、周りの大人の行動に影響を与えている実感はありますか」という質

問に対しては、「かなりある」が1名(11%)、「少しある」が3名(33%)、「どちらでもない」が2名(22%)、「あまりない」が2名(22%)、「まったくない」が1名(11%)と、前述の質問と比較して実感している割合が低い結果となった。昨年度から継続して本プロジェクトに参加し、実際に大人のみなさまとのやり取りを主体的に行なってきたメンバーからは、「若者代表として意見を求められることが多かった、発言に興味を持ってもらった、驚かれることが多かった」「私たちでは思いつかなかった」などのコメントをいただいた際には、私たちの目線で考えたアイデアだからこそできる活動で貢献できたと思った」「秋桜祭や学内販売で自分達が頑張ってアクセサリーを販売している様子を伝えられたので、大人の方々が買ってくれたり、売れるように協力して下さったのだと思います」などの理由により、周りの大人の行動に影響を与えている実感があることが伺える。一方で、今年度より参加したメンバーは、「大人の方にたくさん助けて頂いたが、影響を与えるというところがおこがましいような気がする」などの理由で実感を得るところまで至っていない。このことから、学生メンバーがソーシャル・イノベーション創出の役割を果たし得る可能性は感じるものの、学生メンバーが世代を超えた大人のみなさまと単に協働するだけでは、そのような役割を果たすことができないことがわかった。

来年度のおかね ARITA プロジェクトの活動は、「有田町での交流イベント」と「東京の会場における有田町をテーマにしたイベント」の開催を軸に検討を進めていく予定である。これらの実現を通じて、学生メンバーの行動のうち、どのような要素が周りの大人の行動に影響を与えているのかについて、大人側の目線も入れながら、明らかにしていきたい。

【表 5 : 2023 年度よかね ARITA プロジェクトメンバー9 名に対するアンケート】

Q	活動を通じて、有田の活性化に貢献している実感はありますか
A	かなりある:1名(11%)、少しある:6名(66%)、どちらでもない:2名(22%)
Q	活動を通じて、周りの大人の行動に影響を与えている実感はありますか
A	かなりある:1名(11%)、少しある:3名(33%)、どちらでもない:2名(22%)、あまりない:2名(22%)、まったくない:1名(11%)
Q	その理由をお聞かせください。
A	<p><かなりある></p> <p>秋桜祭や学内販売(こども園)などで大人に活動の説明をすることが多かった、佐賀県の協力いただく方々から若者代表として意見を求められることが多かった、発言に興味を持ってもらった、驚かれることが多かったなどが理由になります。</p> <p><少しある></p> <p>「私たちでは思いつかなかった」などのコメントをいただいた際には、私たちの目線で考えたアイデアだからこそできる活動で貢献できたと思ったため。</p> <p>秋桜祭や学内販売で自分達が頑張ってアクセサリーを販売している様子を伝えられたので、大人の方々が買ってくれたり、売れるように協力して下さったのだと思います。</p> <p>ツアー商品の提案会の際に企画に対するご意見やアドバイスをいただいたことによって実感が湧きました。</p> <p><どちらでもない></p> <p>よかねARITAの行動が大人との関わりによって成り立っているということは理解しているのですが、すごく影響しているのか分からないのでどちらでもないとさせていただきます。</p> <p>あまり実感はないのですが、現地研修で町役場や観光協会と一緒に席でごはんを食べた際に私たちの活動について褒めていただいた(お世辞かもしれませんが…)少しは影響を与えているのかな?と思いました。</p> <p><あまりない></p> <p>大人の方にたくさん助けて頂いたが、影響を与えるというところがおこがましいような気がするから。</p> <p>与えたかわからないため。</p> <p><まったくない></p> <p>いろいろなお言葉をいただき、それに影響されながら活動したが、自身が大人にもたらした影響はあまりないように感じるため。</p>

<謝辞>

2021 年度から開始された「よかね ARITA プロジェクト」が 2022 年 3 月の「昭和女子大学と有田町との連携協力に関する包括協定」締結を経て、今年度は 3 年目の活動となり、より一層具体的な取組に深化できたのは、有田町長の松尾佳昭様、まちづくり課の吉永繁史様、佐藤康二様をはじめとする有田町役場のみなさま、有田観光協会の岩井章様、古田秀之様、cocosara の金氏絵梨奈様、(株) SP 総研の民岡良様、昭和女子大学現代ビジネス研究所事務局のみなさま、アドバイザーである磯野彰彦特任教授による多大なるご支援によるものであり、2023 年度メンバーとして参加の学生メンバー 9 名のみなさまの熱意ある取組によって来年度へ繋がる形を構築できたことに深く感謝申し上げたい。

<参考文献>

熊澤慎太郎 (2022) 「「地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業 (COC+事業)」終了を踏まえた地域活性化策の研究」昭和女子大学現代ビジネス研究所 2021 年度紀要,

http://swubizlab.jp/wp/wp-content/uploads/2022/03/2021_011.pdf,2023.12.3

熊澤慎太郎 (2023) 「産官学金連携による地域活性化の仕組みに関する研究－佐賀県有田町を事例に－」昭和女子大学現代ビジネス研究所 2022 年度紀要,

http://swubizlab.jp/wp/wp-content/uploads/2023/03/2022_010.pdf,2023.12.3

公益財団法人日本生産性本部 (2023) 「労働生産性の国際比較 2023」,

<https://www.jpc-net.jp/research/assets/pdf/report2023.pdf>, 2023.12.29

佐賀県有田町役場 (2018) 「第 2 次有田総合計画」,

<https://www.town.arita.lg.jp/main/272.html>,2023.12.3

野中郁次郎・廣瀬文乃・平田透 (2014) 『実践ソーシャル・イノベーション』千倉書房